

『撰集抄』所載行平説話の成立をめぐる覚書：『源氏物語』と散逸『あま人』物語と

辛島，正雄

九州大学大学院人文科学研究院文学部門国語学国文学：助教授：日本中世文学

<https://doi.org/10.15017/1171>

出版情報：文學研究. 98, pp.17-35, 2001-03-30. 九州大学大学院人文科学研究院
バージョン：
権利関係：

『撰集抄』所載行平説話の成立をめぐる覚書

——『源氏物語』と散逸『あま入』物語と——

辛 島 正 雄

一 『撰集抄』所載行平説話の位相

『撰集抄』卷八に、次のような説話が収められている。

むかし、行平の中納言と云人いまそかりける。身にあやまつ事侍りて、須磨の浦にうつされて、もしほたれつ〔つ〕うらづたひなどしありき給ひけるに、絵島の浦にてかづきする海人の中に、よに心のとまり侍りけるに、たどりよりてたまひて、^(ママ)「いづくにやすみする人にか」とたづね給ふに、この海人とりあへず、

白波のよするなぎさに世をすごす海人の子なれば宿もさだめず

とよみてまぎれぬ。中納言、いとゞかなしう覚えて、なみだもかきあへずとなん。

波のよるひるかづきして、月やどれとはぬれねども、心ありけるたもとかな。波になみしく袖のうへには、月ぞかさぬるなれし面影、そのぬれ衣をかたしき、舟のうちにて世を送るあまべ（諸本三字「あま入」のうちにも、かゝるなぎけの侍るたぐひも侍りけりとおぼえて、ことにあはれに侍り。歌まことに優に侍り。（『岩波文庫』本二四四〜二四五頁）

『撰集抄』所載行平説話の成立をめぐる覚書

須磨の浦に左遷された在原行平が、淡路の絵島の浦でひとりの海人乙女を見そめるこの短い逸話は、これ以前に類話を求められない出所不明の話であるが、後世、謡曲『松風』やお伽草子『松風村雨』でなじみ深いものとなる、都から須磨に下った行平と、その地に住む海人の娘、松風・村雨姉妹との恋物語の、はるかな祖型とも目される内容である。

それにしても、行平にまつわるこのようなラブ・ロマンスは、どのような経緯で発生し、また継承・肉付けされていったものなのであろうか。尾崎雅嘉『百人一首一夕話』（天保四（一八三三）年刊）を見ると、「中納言行平」の項に、

俗説に松風・村雨といふ二人の蟹にたはぶれられし事をいふは、西行の撰集抄に……（引用略）……といふ事あり。これらを伝へ誤りたるものなるべし。（『岩波文庫』本①一五二頁）

と、これが史実に非ざる「俗説」たる旨、わざわざ断っているが、それだけ人口に膾炙した話でもあったのだろう。そして、「俗説」発生のルーツは、ほかならぬ『撰集抄』に求められている。

ただし、後世、この恋物語がかくも著名になった理由としては、発生源と目される『撰集抄』の存在よりも、なんといつても謡曲『松風』での哀切なる形象化が、決定的な役割を果たしたものであるらしい。しかも、香西精氏によれば、『松風』の「かなしく美しい恋物語は、能作者の創作というところに落ちつくことになろう」（同氏著『能謡新考——世阿弥に照らす——』へ一九七二年、檜書店）II「作者と本説 松風」一三二頁とされ、『撰集抄』所載の説話は、「松風」とは、まるきり縁のないものである」（同右）として、その本説とは認められていない。たしかに、『撰集抄』と『松風』とを読み較べると、両者の間にすんなりとは繋がらない断絶があることは、容易に諒解されるところであろう（後節で言及する）。その結果、『撰集抄』の行平説話は、史実として知られる行平の事跡と、俗説ながら広く流布した「松風物」の恋物語群との間で、はなはだ印象の薄い、どっちつかずの存在と化した感が否めない。

とはいえ、『撰集抄』の説話の発生の契機となったものと、謡曲『松風』の成立に必要とされたものとは、意外に重なりあうものが多かったようでもある。私見によれば、『撰集抄』の説話は、出所不明というより、『松風』が多分に「創作」であつたごとく、これまた、ここで新たに創出された、物語断片とでも称すべきものであつたかに思われる。『撰集抄』に多く載せられる詩歌説話については、『和漢朗詠集』や八代集などを中心に先行の詩歌集や説話集にもとづきながら、著者がそれらの歌のやり取りや詞書の部分を適宜につくり変えて、詩歌をめぐる説話に転化させるという、作為による形成過程」が見られる、との的確な指摘（『日本古典文学大辞典 第三卷』一九八四年、岩波書店）「撰集抄」の項（西尾光一氏執筆）六四五頁）がすでになされているが、本稿では、その作為が具体的にいかようにはたらいたかを、できるだけ詳しく掘り起こしてみたいと思う。

二 行平と海人乙女との出会いの可能性

前述のとおり、行平と海人乙女との出会いを伝える文献としては、今のところ、『撰集抄』が最古のものである。したがって、こうした逸話の出現までには、行平が没した寛平五（八九三年）から数えて、三百五十年ほどの時間を要したことになる。ただし、行平の経歴に照らせば、かれが海人乙女と出会う可能性は、当初から考えられないことでもなかつた。再確認に及ばないであろうが、『古今和歌集』卷十八・雑下に、次のようにある。

田むらの御時に事にあたりてつづくのすまといふ所にこもり侍りけるに、宮のうちに侍りける人につかはしける
在原行平朝臣

わくらばにとふ人あらばすまの浦にもしほたれつつわぶとこたへよ（九六二番。以下、和歌の引用は『新編国歌大観』により、歌番号を示す）

勅撰集に明記されるからには、行平の須磨籠居は、公然たる歴史的事件と見なされる。そして、かれの下った「須磨」といえば、ただちに「海人」が連想される土地柄でもあった。行平の歌じたい、「藻塩たれつつ」が「海人」の労働と重ねあわせた表現であるが、もっと端的に、

・すまのあまのしほやく煙風をいたみおもはぬ方にたなびきにけり（卷十四・恋四・七〇八番）

・すまのあまのしほやく衣をさあらみまどほにあれや君がきまさぬ（卷十五・恋五・七五八番）

のごとく、「須磨の海人」はひとまとまりの表現として、すでに『古今和歌集』の時代に固定化しており（遡れば『万葉集』四一六番・九五二番に到る）、しかもそれらは、恋の情景をかたちづくる素材でもあった。——かくて、行平須磨籠居の史実は、「須磨」という地名の喚起するイメージと結びつくことで、〈須磨を舞台とした海人乙女との恋〉といった秘話の創作を、案外簡単に許してしまう条件下にあったことになろう。

もっとも、一般論としていえば、「須磨」以外にも「海人」の住む土地はいくらもあつたはずであり、そこに都から下った貴人が訪れることも、少なからずあつたであろう。歌枕で「海人」にかかわるものを拾うと、『古今和歌集』中にも、「伊勢（の海）」（五〇九番・五一〇番・六八三番・一〇〇六番）、「難波潟」（九一六番・九七四番）、「住吉」（九一七番）、「難波の浦」（九七三番）などがある。とすれば、『撰集抄』と似たような話は、男の名を替え、舞台を替え、ほかにも創作可能であつたことになろう。例えば、次のような場合など——

おきのくにながされける時に舟にのりていでたつとて、京なる人のもとにつかはしける

小野たかむらの朝臣

・わたのはらやそしまかけてこぎいでぬと人にはつげよあまのつり舟（卷九・羈旅・四〇七番）

おきのくにながされて侍りける時によめる たかむらの朝臣

・思ひきやひなのわかれにおとろへてあまのなはたきいさりせむとは（卷十八・雑下・九六一番）

右の『古今和歌集』所載の二首をながめると、小野篁について、配流先の隠岐で海人乙女と出会った、などという話が伝えられていたとしても、さほど奇怪ともいえない、という気になってくる。篁は、同じ『古今和歌集』の、

いもうとの身まかりにける時よみける

小野たかむらの朝臣

なく涙雨とふらなむわたり河水まさりなばかへりくるがに（巻十六・哀傷・八二九番）

という歌をベースに、『篁物語』の主人公ともなつてゆくような人物であるから、行平にもまして、そうした話は発生しやすそうに思われる。ところが、実際には、配所などで海人乙女とかかわる歴史上の人物といつても、『志度寺縁起』に見え、謡曲『海人』で知られる藤原不比等が思い当たるくらいで（その妻であった海人の玉取り説話である。幸若舞曲『大織冠』では藤原鎌足の話とする）、存外類話に乏しいのである。なぜ、その男は「行平」なのだろう。いくら『古今和歌集』を睨んでいても、その理由は判然としない。

三 『撰集抄』所載行平説話の行平説話らしくなさ

『撰集抄』の説話に関して、読みながらやや奇異に感じられる点は、ここでの行平が、歌をまったく詠まないことである。後世の謡曲やお伽草子では、前掲「わくらばに」の歌と、これも『古今和歌集』に採られ、『小倉百人一首』中の作としても名高い、

立ちわかれないなばの山の峰におふる松としきかば今かへりこむ（巻八・離別・三六五番）

という二首の行平詠が、ストーリー展開のうえで重要な位置を占めている。歌人としても知られる行平（例えば『古今和歌集』真名序）と、名もない海人の娘とのかかわりを物語ろうとするのであれば、これは当然のゆきかたである

だろう。ところが、『撰集抄』では、「須磨の浦」に下ったこと以外に、格別この男が「行平」であるべき理由が見当たらないのである。かろうじて、「藻塩たれつつ」という地の文が「わくらばに」の歌を踏まえた表現になっていることで、この男を「行平」らしく見せてはいる。だが、それまでのことなのである。西行に仮託される筆録者も、「行平」の事跡としてよりは、海人乙女の詠んだ歌のほうに共感を示しているのであって、極端なことをいえば、冒頭の「行平の中納言といふ人」をほかの誰かに差し換えたところで、なんの不都合もなさそうなのである。とすれば、この歌説話は、そもそもが〈歌人Ⅱ行平〉への関心から発生したものではなかった、ということになる。

『撰集抄』所載行平説話に見える唯一の歌は、絵島の浦の海人乙女の詠である。この歌は、はやく『和漢朗詠集』巻下・遊女に「海人詠」として出ており（七二二番。第三句「世をすぐす」、『新古今和歌集』巻十八・雑下にも「題しらず／よみ人しらず」として採られる（一七〇三番。第三句「よをつくす」、つとに知られた古歌である。また、話末の評語に「舟のうちにて世を送るあまべのうちにも……」とあるのは、『新古今和歌集』では「白波の」の歌の次に配列されている、

千五百番歌合に

摂政太政大臣

舟のうち波のしたにぞ老いにける海人のしわざもいとまなのよや（一七〇四番）

の歌か、この歌のもととなった、『和漢朗詠集』の、これまた「白波の」の歌の二つ前に載せられる詩序の一節、

翠帳紅閨、万事之礼法雖異、舟中浪上、一生之歡会是同 以言（七二〇番）

を踏まえたものようであるので、この説話は、『和漢朗詠集』と『新古今和歌集』あたりから作為されたものであろうと、容易に推察される。『新古今和歌集』との関係では、すでに指摘のあるように（『岩波文庫』本「解説」三五九頁）、評語の「月やどれとはぬれねども、心ありけるたもとかな」が、明らかに、

八月十五夜和歌所歌合に、海辺秋月といふことを

ところあるをじまの海人のたもとかな月やどれとはぬれぬものから（巻四・秋上・三九九番）
に拠った表現であるので、ますますそのことの信憑性は高まるように思われる。

四 散逸物語『あま入』との接点

ところが、「白波の」の歌については、さらに注目すべき別出資料が存する。『風葉和歌集』巻十八・雑三に、次のようにある。

なにはわたりにて見あひける人の、宿をとひはべりければよめる

あま入のむすめ

白浪のよするなぎさに世をへつつあまのこなれば宿も定めず（一三五三番）

すなわち、「白波の」の歌は、散逸物語『あま入』の作中歌なのであった。

『撰集抄』と『風葉和歌集』とを見較べると、第三句に小異はあるものの、歌が共通することはもちろん、男に居所を問われて海人の娘が詠んだ、とする詠歌状況までそっくりである。これが偶合であるとは、にわかには信じがたいところである。両者には、なんらかの繋がりが想定されてしかるべきであろう。

散逸物語『あま入』は、『宝物集』巻五に、

ナニハノ浦ノアマハ、十六年ト云ニ、願ノ力ニ依テ、兼光ノ少将ノ妻トナリタリトコソハ、アマノ物語ニハ申
タムメレ。（『新日本古典文学大系』本二五一頁）

と見える物語と同じものであるらしいので、平安時代の成立と見てさしつかえなく、鎌倉時代の成立である『撰集

抄』に先立つものであることは動かない。また、『風葉和歌集』は文永八（一二七二）年の撰進であるから、『撰集抄』の編まれる頃（通説では一二五〇年の前後とされる）、『あま入』はたしかに伝存していたのである。とすれば、『撰集抄』の話というのは、じつは作り物語『あま入』がベースで、それを行平の逸話として簡略に語り換えたものなのではないか、との疑いが生ずる。

『あま入』は、少将兼光と難波の海人の娘との、身分違いの恋の物語である（お伽草子『あま物語』が、原作『あま入』の面影をよく残している）が、表現レベルで見ると、『撰集抄』では、その出会いの部分だけを切り取って、行平須磨籠居の史実とからめた話に転用したもののごとくである。しかしながら、ここでひっかかるのが、行平の逸話に混淆してくるのが、なぜ、よりによってこの『あま入』なのか、ということである。それを、たまたま『あま入』のことは知っていたから利用しただけ、と考えれば、それ以上議論の余地はない。が、そうなるためには、やはり、それ相当の理由があったものと考えたい。ところが、両者をいくらかつきあわせてみても、行平の逸話に『あま入』がかかわってくるべき筋道やきっかけが、皆目見えてこないのだ。

『あま入』と『撰集抄』所載行平説話との間に、無関係ではありえない親近性が確認されるいっぽうで、両者をストリートに結びつけることにも抵抗があるとすれば、あと考えられるのは、両者を橋渡しすべく、なにものかが介在した、ということであろう。はたして、そのようなものが存在するのか。私見によれば、その「なにものか」とは、ずばり『源氏物語』であったと思われる。

五 光源氏から行平への逆流

光源氏の須磨謫居が行平の須磨籠居を准拠としていることは、『河海抄』など古注での詮索を俟つまでもなく、

『源氏物語』そのものが明示するところである。

(1)おはすべき所は、行平の中納言の藻塩たれつつわびける家居近きわたりなりけり。海づらはやや入りて、あはれにすごげなる山中なり。(『新編日本古典文学全集』本②一八七頁。以下、『源氏物語』の引用は同書による) ↓引歌は、前掲「わくらばに」の歌。

(2)須磨には、いとど心づくしの秋風に、海はすこし遠けれど、行平の中納言の、関吹き越ゆると言ひけん浦波、夜々はげにいと近く聞こえて、またなくあはれなるものはかかる所の秋なりけり。(一九八〜一九九頁) ↓引歌「つのくにのすまといふ所にはべりけるととき、よみ侍りける／中納言行平／たび人はたもとすずしくなりにけりせきふきこゆるすまのうらかぜ」(『続古今和歌集』卷十・羈旅・八六八番)。

思うに、『古今和歌集』によって周知のものであったはずの行平須磨籠居の史実も、『源氏物語』のなかで光源氏の須磨謫居とこのように二重写しに取り上げられることによって、その知名度は飛躍的に上がったのではなかったか。

行平という人物は、『伊勢物語』の主人公たる業平の兄であることも手伝って、いかにも説話の世界に豊富な話題を提供しているような印象があるのだが、実際には、その格別の素姓ほどには、説話化の興味の対象とはならなかったようである。須磨籠居のことにしても、つとに『古今和歌集』に明言されていながら、『源氏物語』で先例として引きあいに出されるまで、ほとんど人々から関心を寄せられた形跡がないのだ。そのようななか、かれの須磨籠居の逸話のみが、『源氏物語』以後、例外的といってよいほどに、『撰集抄』から謡曲・お伽草子へと引き継がれてゆく背景には、『源氏物語』で印象的に取り上げられたことの影響が、ことのほか大きかったように思われるのである。謡曲『松風』が、源氏寄合のイメージを駆使する作柄であることも、けっして偶然のしわざではないだろう。つまり、『源氏物語』に取り上げられ、それが広く読まれたことによって、在原行平という忘れられかけた人物の、

いわば再発見・再認識が行われたということ、これらは示唆しているように思われるのだ。

ここまで来て、ようやく、「行平」の事跡についても、周知の光源氏の経歴とダブらせながら、尾緒のついてゆく道が開けたことになる。——『源氏物語』で光源氏が須磨に侘び住まいするのは、行平が須磨に籠居した史実に倣うものだ。すると、文献に確かめることはできないけれど、光源氏が流謫中に明石の入道の娘と恋をしたように、行平にも須磨でのラブ・ロマンスがあったかもしれない。いや、『源氏物語』がわざわざ二度も行平を引きあいに出しつつそのように描いているからには、きっと行平にもなにかあったに違いない。——こうして、行平と海人乙女とは、そもそもは行平の事跡を襲うかたちでなされていたはずの光源氏の人物像から、本末顛倒した類推がはたらくことによつて、その出会いがお膳立てされることとなった。架空の人物である光源氏にリアリティを与えるべく引きあいに出された行平が、かえって光源氏のもつリアリティに助けられて、平板な歴史的存在であることを超えた、説話的興味を繋ぐ人物へと変貌を遂げるのである。

六 須磨から絵島へ「浦づたひ」

ところで、『撰集抄』所載行平説話のなかで、後世の話と大きく相違する点は、かれが恋をした海人乙女が、「須磨」ならぬ「絵島の浦」の者とされることであろう。再度本文を掲げれば、次のようにあった。

……身にあやまつ事侍りて、須磨の浦にうつされて、もしほたれつ「つ」うらづたひなどしありき給ひけるに、
絵島の浦にてかづきする海人の中に、よに心のとまり侍りけるに、たどりよりてたまひて、「いづくにやすみする人にか」とたづね給ふに、……

『古今和歌集』の詞書からは想像もつかなかったことだが、行平は、ひとつ所にじっとしていたわけではなかつ

た。「浦づたひなど」をしていて、淡路の「絵島の浦」に到り、ゆくりなくもひとりの海人乙女に恋をした、というのである。なにやらここの展開には、須磨から明石に移り、入道の娘と出会う光源氏の姿が、彷彿するではないか。加えて、「浦づたひ」ということばが注意される。なぜなら、このことばは、「須磨」巻において、上洛途次の大宰大弐一行のありさまを叙して、「浦づたひに逍遙しつづ来るに」(②二〇三頁)と見え、さらには、明石に移った光源氏が京の紫の上に宛てた手紙の歌のなかに、

はるかにも思ひやるかな知らざりし浦よりをちに浦づたひして(「明石」巻②二三六頁。『物語二百番歌合』二六一番、『風葉和歌集』五八九番)

と用いた表現でもあるからだ。そして、『無名草子』では、『源氏物語』の巻々の論において、「『明石』は、浦より浦に浦伝ひたまふほど」(『新編日本古典文学全集』本二二二頁)と、右の歌を踏まえつつ、光源氏が須磨から明石に移るあたりの話が印象的だ、と評しており、例えば、『秋篠月清集』の、

- ・あかしよりうらづたひゆくともなれやすまにもおなじ月を見るかな(一九六番)
- ・うらづたふそでにふきこすしほかぜのなれてとまらぬなみまくらかな(四八二番)
- ・あかしがたすまもひとつにそらさえて月にちどりもうらづたふなり(七六二番)

といった歌などに徴しても、「浦づたふ(ひ)」ということばが、光源氏の須磨流謫のイメージに繋がるキーワードのひとつであることが、十分に察せられるのである。「明石」巻に「浦づたひ」という異名が伝わるのも、こうした『源氏物語』の享受の実態と見あうものであろう。つまり、『撰集抄』の行平像には、表現のうえからも光源氏の面影が拭いきりがたく染みついているのであり、「むかし、行平の中納言と云人いまそかりける」と、行平にまつわる説話であることを標榜しながらも、実際には、『源氏物語』をもとに派生した作り話であると、みずから種明かししたも同然なのである。

かくして、『撰集抄』における行平の逸話は、光源氏のモデルであった行平に、光源氏的事跡を付会して成立した、後人の作り話、ということと一件落着しそうである。出会いの場所を「絵島の浦」とした理由は詳らかでないが、「明石」巻の光源氏の歌に、

あはと見る淡路の島のあはれさへ残るくまなく澄める夜の月（②二三九頁）

とあり、このあたりがヒントとなつて、「明石」の対岸「淡路の島」にある歌枕「絵島の浦」が「浦づたひ」先として思いつかれた、くらいの事情は想像できようか。また、歌ことば「絵島」には「絵」が掛けられることが多いので、ここに、須磨の絵日記からの連想があつた、と考えられなくもない。

「絵島」は、はやく『枕草子』「島は」の段に見えているが、歌枕としては、『堀河百首』において、

淡路島絵島が磯にあさりする棚無小舟いく世へぬらん（海路・師頼・一四四番）

と詠まれて以降、むしろ中世になつて使用頻度が上がる地名のようである。そして、その理由はともかく、「絵島」という地名が光源氏の須磨・明石流離の話と結びついてくる事実そのものは、中世文芸のなかに、容易に確認できる。例えば、『平家物語』を見ると、巻五「月見」に、

やうく秋もなかばになりゆけば、福原の新都にまします人々、名所の月を見んとて、或は源氏の大將の昔の跡をしのびつゝ、須磨より明石の浦づたひ、淡路のせとををしわたり、絵島が磯の月を見る。（新日本古典文学

大系」本⑤二七二頁）

とあり、光源氏の名こそ出ないが、巻九「落足」にも、

或は須磨より明石のうらづたひ、泊定めぬ梶枕、かたしく袖もしほれつゝ、臈にかすむ春の月、心をくだかぬ人ぞなき。或は淡路のせとを漕とをり、絵島が磯にたゞよへば、波路かすかになきわたり、友まよはせる小夜衛、是も我身のたぐひかな。（①一八二頁）

とある。ここでは、〈須磨→明石→絵島〉でもって、「浦づたひ」地点三点セットの観を呈しているのである。さらに、お伽草子『岩屋の草子』では、

三月の中の二日に、明石の浦に着き給ふ。聞ゆる明石の月なれば、色ある袖にぞ宿りける。光源氏の大將の、須磨より明石へ、浦伝ひて、寄せ来る波をながむれば、くだけて月ぞ袖に宿る。……物ごとにおもしろく、行平の中納言、「藻塩たれつつ」とながめしも、海士の焚く藻の夕煙、はかなや霞にまがひて、うすく見えぞわたりける。(新潮日本古典集成一所収本一四九頁)

と、光源氏からさらに行平までが引きあいに出される(両者の知名度の高低を如実に示す順番といえよう)のだが、物語はその後、女主人公である対の屋の姫君が置き去りにされる場所が、「淡路の絵島が磯」(一五七頁)であったりもする。いずれにせよ、中世において、光源氏の事跡には、淡路の「絵島」へと繋がる連想の回路が、いつしか確立していたようなのである。^(注)

なお、『詞林采葉抄』第四「陬磨浦」の項に出る行平の逸話に、かれの「わくらばに」の歌に応えて、弟の業平が、「交野ノ御狩ニコトヨセテヒソカニ彼浦ニ尋行」ったとの説が見え、別れのおりの記述が、

比ハ八月廿日アマリノ空ナリケレバ、有明ノ月中空ニノコリテ、海上漫々タル銀浪千里ノ水凜々トシテ、淡路嶋繪嶋ガ磯ハルぐト見ヘ渡ルニハ、只遠山ノ雪ノ曙ノ心地シテ、イツクヲ天末トモミヘズ、イツクガ海岸トモ弁ヘザリケレバ、此勝景ニ心ノミヒカレテ、ヤガテ爰モトニシバシハカクテモアラマホシク覚ユルホドナレバ、……(ひめまつ^の会編著『詞林采葉抄』(一九七七年、大学堂書店)一〇二頁。私に読点・濁点を付した)

のごとくになされている。おそらく、この逸話も、『詞林采葉抄』がつづけて引くところの、光源氏須磨謫居の話、とりわけ親友の頭中将が源氏の寓居を訪ねて行く美談になぞらえて創作されたものであろうが(「交野ノ御狩ニコトヨセテ」は、もちろん『伊勢物語』第八十二段に基づく)、ここにも「絵嶋ガ磯」が見えているのは、『撰集抄』との繋が

りを思わせ、興味深い。

しかしながら、このように見てきながらも、依然、肝腎のところかはつきりしないもどかしさが残るのだ。それは、行平の懸想するのが、明石の君のような没落貴族の娘でなく、名もない卑賤の海人乙女であるのは、むしろ素朴な説話らしさの演出として納得されるとしても、なにゆえ、その海人乙女に「白波の……」と詠ませるような展開になるのか、ということである。ここに、この歌が据えられる必然性とは？

率直な印象として、『撰集抄』所載行平説話は、『源氏物語』に寄りかかって作られたとしか思えないようなものであるのだが、そこに唐突に接ぎ木されたように見えるのが、『あま入』由来の歌の場面なのである。この、『源氏物語』から『あま入』へというかたちでなされた話の抛り所の切り換えには、なんらかの意味があるのだろうか。作者の思惑としては、行平が見そめる相手を海人乙女とした時点で、話の展開によりふさわしいものとして『あま入』が選ばれたのには違いあるまいが……。

七 『撰集抄』所載行平説話の成立事情

ここで、重要な事実を報告しておきたい。それは、光源氏が須磨・明石と流離し、そこで入道の娘と出会う物語の粉本となったもののひとつに、じつは『あま入』があった、ということである。両者の関係の詳細については、拙稿「『明石』巻の「海人の子」をめぐる覚書——散逸『あま入』物語のことなど——」（『文学研究』97輯、二〇〇〇年三月）によらねたいが、きわめて深い影響関係にあると認められ、難波の地を舞台に始まる兼光と海人の娘との宿命的な身分違いの恋の物語である『あま入』は、運命に導かれるようにして始まる明石の地での光源氏と入道の娘との物語へと、みごとに換骨奪胎されていたのである。したがって、こうしたケースのつねとして、それとわかる者

には、『源氏物語』を透かして、その向こうに、その作品世界の形成に参与した『あま人』の物語世界が、多少なりと見えてくるはずなのだ。そして、『撰集抄』所載行平説話を創作した者とは、ほかでもない、そのことに気づきえた、世にも稀なる人物だったと推察されるのである。

縷説してきたとおり、行平と海人乙女との出会いの逸話が『撰集抄』において作られるさい、直接のきっかけを与えたのは、行平の事跡を踏まえた光源氏の須磨・明石での物語であつたとおぼしい。だが、作者は、二人の出会いのディテールについては、かならずしも『源氏物語』によることに固執しなかつた。とはいえ、それとて『源氏物語』と無関係だつたのではない。そこにもち込まれたのは、つとに知られた物語ではあつたが、『源氏物語』にすっかり摂り込まれたことで影を薄くし、両者の関係についてもほとんど忘れられかけていた古物語、『あま人』であつた。作者は、光源氏の須磨・明石の物語の背後に『あま人』の存在を嗅ぎ取り、男女の出会いのかたちとしては、むしろ素朴な『あま人』でのありかたにまで回帰させたほうが、説話としてふさわしいと判断したのであろう。——このような経緯を考へることではじめて、光源氏もどきの行平に対して「白波の……」と海人乙女が答へることになる事情も、無理なく説明できるように思われる。と同時に、これを表面的にしか捉えられない場合、拠り所が『源氏物語』から『あま人』へと、なんとも無造作に切り換わつたようにしか見えないのも、たしかなのである。整理してみると、以下のような経過をたどりながら、三つの作品はかかわりあつていたかと推察される。

A 行平、須磨籠居の史実（『古今和歌集』）。

B 物語『あま人』の成立。

↓A・Bの間に特定の連関はない。

C 『源氏物語』は『あま人』を撮取するとともに、光源氏須磨謫居のモデルを行平須磨籠居に求めた。

↓A・Bが『源氏物語』内部で出会い、併存する。

D 『撰集抄』では、行平の須磨籠居中に海人乙女との出会いがあった、とするが、それは、光源氏が須磨・明石と流離する物語をベースに、主客逆転した類推がはたらくことで創作されたものである。同時に、海人乙女とのかかわりのディテールについては、さらに遡って、『源氏物語』の粉本である『あま入』の場面が借用された。

↓Cを経過することで、A・Bの融合した新たな物語が発生する。

八 『あま入』散逸以後

けつきよくのところで、『撰集抄』所載の行平と海人乙女とが出会う説話は、『源氏物語』に親昵する者の手によって創作された話、ということに落ち着きそうである。このことは、謡曲『松風』の世界が、『源氏物語』のイメージを鏤めてかたちづくられたことと、軌を一にする現象であった。『松風』の、『源氏物語』須磨の巻における光源氏造型の背後にある行平を光源氏に重ね（『新潮日本古典集成 謡曲集 下』所収「各曲解題」四八四頁）て行平を造型する創作手法は、そのまま『撰集抄』での行平の逸話形成の方法についても当てはまることなのである。

と同時に、『撰集抄』所載行平説話と『松風』とでは、須磨に下った行平が海人乙女に恋をするという骨子以外は、ずいぶんとその趣を異にしているのも事実である。そして、その違いは、ひとえに、『あま入』の存在を前提としかたか否か、にかかっているようである。『撰集抄』の時点では知られた物語であったらしい『あま入』も、『松風』成立の頃にはすでにその存在は忘れ去られ、『源氏物語』の粉本にそのようなものがあつたことも、著名な「白波の」の歌がそのような物語の作中歌であつたことも、もはや気づかれなくなっていたのであろう。

あわせて、『あま入』のことを知らなかった謡曲作者にとつて、「白波の」の歌は、『源氏物語』中すでに「夕顔」

巻で引用されていて、なまじ印象に残るものでもあるため、なおのこと須磨流謫とかかわらせて理解するのを困難にするという事情もあつたであろう（じつは、「夕顔」巻も『あま入』と深くかかわるのだが、それについても前掲拙稿を参照）。

「尽きせず隔てたまへるつらさに、あらはさじと思ひつるものを。今だに名のりしたまへ。いとむくつけし」とのたまへど、「海人の子なれば」とて、さすがにうちとけぬさまいとあいだれたり。（①一六二頁）

この「夕顔」巻の名高い一節は、連歌の寄合の集大成である『連珠合璧集』下に、

海士子トアラバ、

貝ひろふ わかめかる あそびたわぶれ 遊の浦丹後 夕がほ

白浪のよするなぎさに世をつくす海士の子なれば宿もさだめず（『中世の文学』所収本一二九頁）

と指示されているほか、謡曲『半部』で、「定めぬ海人のこの宿の、主を誰と白波の、よるべの末を頼まんと」（『新編日本古典文学全集』本④三四六頁）と変奏されたりもしている。このように、「白波の」の歌が、「夕顔」巻に基づく表現類型のなかに、しっかりと定着してしまうことも、『撰集抄』に載るようなかたちでは、そのままに受け容れにくくした理由であろう。とはいえ、著名な貴人と身分卑しい女との束の間の出会い、という設定の醸し出すロマンテイシズムは、謡曲作者の創作意欲をそそるに十分であつたか、海人乙女との恋という骨子だけは活かして、あと二首の著名な行平詠を軸に据え、光源氏須磨流謫のイメージとダブらせながら、独自に物語が構築されていったものと思われる。

こうして見ると、『撰集抄』所載行平説話が、ほかに類を見ない孤立したものであるのも、無理からぬところがあつた。というのも、その説話が、光源氏の須磨・明石流離のイメージを借りながらも、より根本的には、作り物語『あま入』の語り換え、という性質のものであつたからである。しかも、肝腎の『あま入』そのものが、その後、

人々の前から姿を消したため、『撰集抄』の話も、その成立の機微を理解することははなはだ困難となり、行平と海人乙女との出会いを語る最初のものとして捉えるよりほかなくなってしまうのである。そして、謡曲『松風』の成立・流布とともに、それはますます影の薄いものとならざるをえなかったのであった。

とはいえ、失われた古物語との接触の跡を如実に示すことで、この小さな説話は、『源氏物語』の形成にかかわるある秘密を、そつと示唆してもいたわけであり、その存在意義は、『あま人』享受の具体相を知るうえで、まことに貴重なものであったといえよう。

九 『枕草子』の「絵島」をめぐる

最後に、派生的なことから気づいたことをひとつ。

先に、「絵島」という地名は、つとに『枕草子』「島は」の段に見えるものであることを記した。そこには、次のようにある。

島は 八十島。浮島。たはれ島、絵島、松が浦島。豊浦の島。籬の島。（『新日本古典文学大系』本二四三頁）

ところで、ここになぜ「絵島」が現れるのかについてであるが、それについては、萩谷朴氏に説がある。すなわち、同氏著『枕草子解環 四』（一九八三年、同朋舎）に、『撰集抄』所載行平説話を引用し、「前項「たはれ島」に関する業平説話から、その兄行平の説話を連想して、「絵島」を挙げたと考えられる」（二一八頁）と説く（それに先立つ『新潮日本古典集成』本でも、「業平説話のたわれ島から行平説話の絵島へ」（⑨九九頁）と注する）。また、その後に出た『新日本古典文学大系』本にも、「淡路国の島。在原行平が須磨に流された時、この島の海女と親しくなると伝えらる」（二四三頁）と注している。しかし、これらはいずれも、『撰集抄』というはるか後世の文献にしか見えない話を

根拠とするため、にわかには従いがたいものがある。萩谷説が認められるためには、行平の話のルーツを平安中期以前にまで遡って見出す必要があるわけだが、その可能性ははなはだ低いであろうというのが、本稿を記し終えての率直な印象である。

(一九九四年九月稿／二〇〇〇年一〇月補訂)

(注)

なお、『保元物語』巻下「新院讃州に御遷幸の事」には、

爰はすまの関屋と申ければ、行平中納言の流されて、いかなる罪の酬にや、藻塩たれつゝとながめけん所にこそと思召す。彼は淡路の絵嶋と申せば、大炊の廃帝の移されて、いくほどなくてかくれさせ給けん所にこそと知しめす。今は御身に思召知られて哀也。(旧) 日本古典文学大系 本一六三頁)

とあって、「絵嶋」は、大炊の廃帝(淳仁天皇)の配流先とされている。前掲『平家物語』の「月見」の一節も、延慶本では、八月十日余ニモ成ニケレバ、新都へ供奉ノ人々ハ、聞ユル名所ノ月ミムトテ、思々ニ被出ニケリ。或ハ光源氏ノ跡ヲ追ヒ、諏磨ヨリ明石へ浦伝ヒ、或ハ淡路ノ廃帝ノ住給シ絵嶋ヲ尋ヌル人モアリ。(北原保雄・小川栄一編『延慶本平家物語 本文篇 上』(一九九〇年、勉誠社) 四一七頁) となっている。